

令和3年度全国学力・学習状況調査 守口市の結果概要

本調査は義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ることや学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的としています。

本市では、平成19年度以降本調査に参加しており、これまでの調査結果の経年比較をとおして、長期的な改善・課題について分析し、課題に正対した取組みを進めるようにする等、学校に対し支援することで活用しております。

令和3年度につきましては、新たに策定した市学力向上プランに基づき取組みを進めているところですが、今回の調査結果をもとに、本市立学校の児童生徒の強みや学校の取組み成果等を、過去の関連問題との経年比較や正答数の層に応じた児童生徒質問紙とのクロス集計などの分析により明らかにし、施策の見直しや改善を行うとともに、学校・家庭・地域が連携した取組みのより一層の充実につなげていきます。

調査概要 (文部科学省発行リーフレットより)

1. 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査の対象

- 小学校及び義務教育学校前期課程（以下「小学校等」と表記）第6学年（学校数：14校 959人が参加）
- 中学校及び義務教育学校後期課程（以下「中学校等」と表記）第3学年（学校数：8校 874人が参加）

3. 調査の内容

- 教科に関する調査 小学校等：国語、算数 / 中学校等：国語、数学
- 質問紙調査 児童生徒に対する調査 / 学校に対する調査

※本調査により測定できるのは学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面です。

全体のポイント

〈国語、算数・数学〉

- 令和2年度は、新型コロナウイルス感染症による長期間の臨時休業があったが、国語の『話すこと・聞くこと』〈小学校、中学校〉、算数の『測定、変化と関係』〈小学校〉などで70%以上の正答率を示すなど、**全体的に、児童生徒の学力は概ね定着**していた。（全国平均の正答数の差は1問以下）
- 半面、国語の『読むこと』や、算数・数学の『図形』において正答率が低い問題や無解答が多い問題がみられたほか、引き続き、**思考力・判断力・表現力の育成が課題**である。
- 全国（公立）と比べると、小学校の標準偏差（成績上位層と下位層の差）が大きい傾向がみられた。

〈学習状況、学習意欲等〉

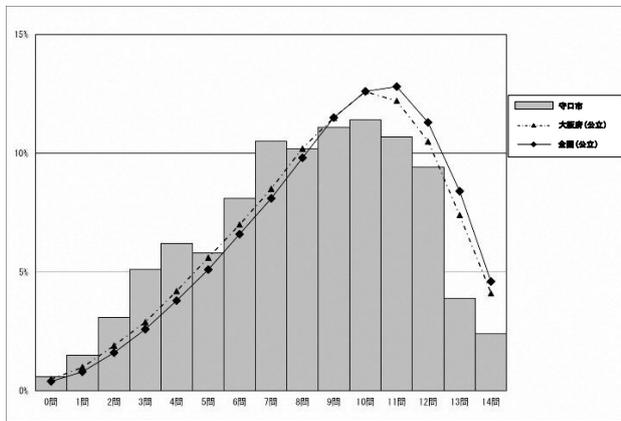
- 「国語の勉強が好き」「算数（数学）の勉強が好き」の肯定的回答の割合は特に中学校では全国平均より高く、「計画を立てて勉強している」の肯定的回答の割合や中学校の「学校の授業以外での平日における1日当たりの学習時間」で1時間以上と回答した割合などは前回調査（令和元年度）と比べて高く、**学習意欲や学習習慣が向上**した。また、「授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んだ」などの肯定的回答の割合も高く、主体的・協働的で深い学びの実現に向けた**授業改善が着実に進展**している。一方、家庭での読書時間が少なく、**読書習慣に課題**がある。
- 「自分にはよいところがある」や「将来の夢や目標」、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることができる」などについて、全国平均と比べて低く、**自己有用感や地域課題解決の育成が課題**である。

教科に関する調査 結果概要

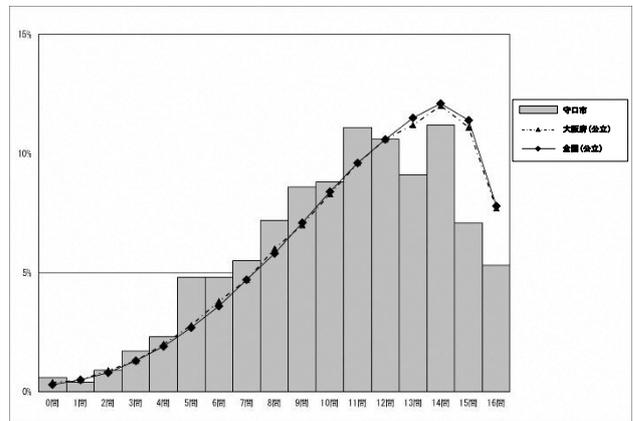
		国語			算数・数学		
		平均正答数 (全 14 問)	平均正答率	標準偏差	平均正答数 (全 16 問)	平均正答率	標準偏差
小学校	守口市	8.1	57.8	3.2	10.5	65.4	3.6
	大阪府	8.8	63.2	3.1	11.2	69.7	3.5
	全国	9.1	64.7	3.1	11.2	70.2	3.5
中学校	守口市	8.5	60.7	2.8	8.7	54.1	3.7
	大阪府	8.7	62.0	2.9	8.9	55.5	3.8
	全国	9.0	64.6	2.8	9.1	57.2	3.7

正答数分布グラフ (横軸：正答数、縦軸：割合)

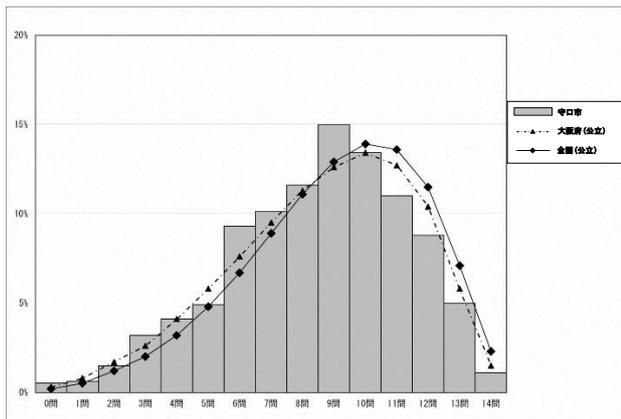
【小学校国語】



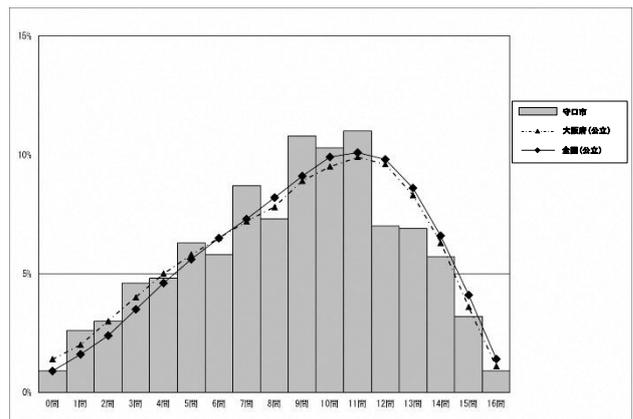
【小学校算数】



【中学校国語】



【中学校数学】

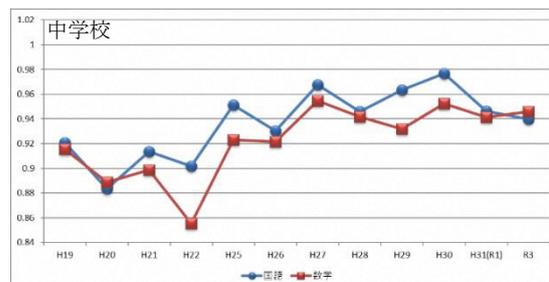
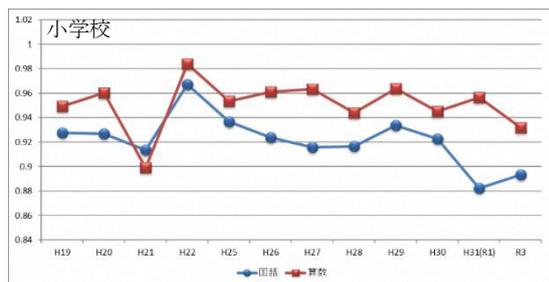


平均正答数は全国との差が1問以下であり、特に中学校等においては全国との差が0.5問以下と全国との差が小さく、ほぼ全国並みといえる。また、全国と比較して、小学校の標準偏差(成績高位層と低位層の差)が大きい傾向がみられた。

正答数分布では小・中学校両教科ともほぼ全国との差はなく同様の分布傾向であったが、低位層の割合が大きい傾向がみられた。

教科別平均正答率を全国との経年比較で見ると、中学校等では長期的には向上傾向である。一方、小学校の国語は全国との差は縮まったものの、長期的にはやや低下傾向である。

【参考】教科別平均正答率 全国との経年比較(グラフ) ※全国を1.00として、H30以前はA・B区分を合算して算出



各教科の状況

小学校国語

- 『話すこと・聞くこと』の「目的に応じ、話の内容が明確になるようにスピーチの構成を考える」や「資料を用いた目的を理解する」、「目的や意図に応じ、資料を使って話す」問題、『言葉の特徴や使い方に関する事項』の「文章全体の構成を捉え、資料を使って話す」問題などの正答率は70%以上であった。
- 『読むこと』の「目的を意識して、中心となる語や文を見付ける」や「目的に応じ、文章と図表とを結びつけて要約する」問題（問題例①参照）などの正答率は30%未満であった。

小学校算数

- 『測定』の「条件に合う時刻を求めることができる」や『データの活用』の「棒グラフから、数量を読み取ることができる」、「棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができる」や『変化と関係』の「速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察することができる」問題の正答率は約90%であった。
- 『図形』の「三角形の面積の求め方について理解している」や「複数の図形を組み合わせた平行四辺形について、図形を構成する要素などに着目し、図形の構成の仕方を捉えて、面積の求め方と答えを記述できる」問題の正答率は約40%であった。解答類型を見てみると、公式そのものを間違っていたり、説明に必要な条件に沿って記述できていなかったりするなどの間違いが多く、面積の公式や底辺・高さの意味理解をはじめ、どのように求めたかなど、解き方の過程を説明する力に課題があるといえる。

中学校国語

- 『話すこと・聞くこと』の「話し合いの話題や方向を捉える」や「質問の意図を捉える」問題の正答率は86%以上であった。
- 『読むこと』の「文脈の中における語句の意味を理解する」や「文章に表れているものの考え方を捉え、自分の考えをもつ」問題の正答率は40%未満であった。

中学校数学

- 『関数』の「与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができる」問題（問題例②下段参照）や「問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる」問題の正答率は80%以上であった。このほか、『数と式』の「数式と加法と減法の計算ができる」問題（問題例②上段参照）の正答率（77.5%）は全国平均（77.1%）を上回っており、過去類似の問題との経年比較からも定着状況については向上傾向がみられた。
- 『図形』の「平行四辺形になる条件を用いて、四角形が平行四辺形になることの理由を説明することができる」や「ある条件の下で、いつでも成り立つ図形の性質を見出し、それを数学的に表現することができる」問題の正答率は低かった（正答率42.0%、25.0%）。

2 相川さんの学級では、身近にある便利なものについて調べています。相川さんは、面ファスナーを選びました。次は相川さんが読んだ【資料】です。これをよく読んで、あとの問いに答えましょう。

面ファスナー

面ファスナーは、かさやくつなど、さまざまな製品の留め具として使われています。簡単にくっつけたり、はがしたりすることができ、とても便利な道具です。

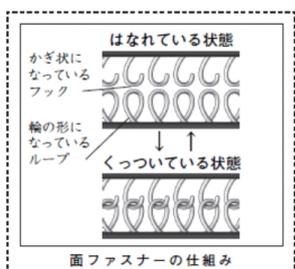
面ファスナーは一九四八年にスイスで起こったあるできごとがきっかけで開発されました。狩猟のため、愛犬をつれて山に登ったジョルジュ・デ・メストラルは、犬の毛に野生のゴボウの実がたくさんついていて、気がつきました。不思議に思い、その実を持ち帰って顕微鏡でくわしく調べてみると、ゴボウの実は先の曲がったかぎ状のトゲでおおわれていることがわかりました。そのトゲが犬の毛にからみついていたのです。このことをヒントにメストラルは研究を重ね、

数年後、特殊な素材を使い、面ファスナーを作り出しました。

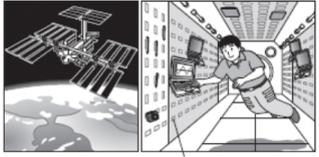
一九六〇年に、日本ではじめて面ファスナーの製造・販売が始まりました。しかし、そのよさや使い道はなかなか世の中に伝わりませんでした。広く知られるようになったきっかけは、一九六四年十月の東海道新幹線の開業でした。新幹線の座席のヘッドレストカバー（頭をあてる布）の留め具として、面ファスナーが採用されたのです。新幹線の清掃作業の際には、短時間でヘッドレストカバーを交換する必要があります。そのため、一つ一つ取り外さなければならぬホックやボタンより留め外しの簡単な面ファスナーの方が、留め具として適していたのです。誰もが注目する新幹線に使われたことで話題となり、その存在が日本中に知られるようになりました。

一九八〇年代には、私たちの身近にある製品でも使われるようになりました。財布やかばん、かさなどの家庭用品をはじめ、サポーターや血圧計の巻き付けバンドなどの医療用品にも広がってきました。布のように柔軟性があり、物や体の形にぴったり合わせることができる面ファスナーが適していたからです。中でも大流行したのが、面ファスナーを使った運動ぐつでした。ひもぐつに比べ、手間をかけずに目的や好みに合わせてしめぐあいを調節することができるよさが支持されたのです。同時に、素材の開発も進められました。現在では水に強く熱にも強い素材で作られているものもあります。また、しつかりとくっつき簡単にはがすことができる面ファスナーは、宇宙でも使われています。地球のため、物がうかびます。宇宙ステーションの中は無重力状態のため、物がうかびます。そこで活躍しているのが面ファスナーです。国際宇宙ステーション内のかべや天井には、あらゆる場所に面ファスナーがつけられています。ペンやスプーン、カメラやコンピュータなど、身の回りの全ての物が固定できるようになっています。

一人の気づきから誕生した面ファスナーは、人びとの要求に応える形で、活躍の場を広げられました。身近な生活場面だけでなく、宇宙空間にまで広がり、さらなる便利さが追求されています。



面ファスナーの仕組み



面ファスナー

国際宇宙ステーションとその内部



〈条件〉

- ヒントになったことと、面ファスナーのくっつく仕組みが分かるように書くこと。
- 【資料】の中の文章と「面ファスナーの仕組み」から言葉や文を取り上げて書くこと。
- 五十文字以上、八十文字以内にとめて書くこと。

※左のげんこう用紙は下書き用なので、使っても使わなくてもかまいません。解答は、解答用紙に書きましょう。
※◆の印から書きましょう。とちゅうで行を変えないで、続けて書きましょう。

80字

50字

【趣旨】

目的に応じて、文章と図表とを結びつけて必要な情報を見付けることができるかどうかをみる。

■ 学習指導要領における内容

- 〔第5学年及び第6学年〕 思考力、判断力、表現力等
- C 読むこと
- ウ 目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。

(正答例)

メストラルは、ゴボウの実が犬の毛にからみついていたことをヒントに、かぎ状のフックが輪の形をしたループに引っかかることでくっつく仕組みの面ファスナーを作り出した。(80字)

	正答率
守口市	27.0%
全国(公立)	34.4%



相川さん

問題例 ② (中学校 数学)

1 $(5x + 6y) - (3x - 2y)$ を計算しなさい。

【趣旨】文字を使って数や図形の性質を説明したり、方程式を解いたりする場面において必要となる、次のことができるかどうかをみる。

- ・数・式などを活用して、数学的に処理すること
- ・整式の加法と減法の計算をすること

■ 学習指導要領における領域・内容

〔第2学年〕A 数と式

(1) 具体的な事象の中に数量の関係を見だし、それを文字を用いて式に表現したり式の意味を読み取ったりする能力を養うとともに、文字を用いた式の四則計算ができるようにする。

ア 簡単な整式の加法、減法及び単項式の乗法、除法の計算をすること。

正答 $2x + 8y$

	正答率
守口市	77.5%
全国 (公立)	77.1%

【過去類似問題の経年比較】

H19 A問題 2 (1)

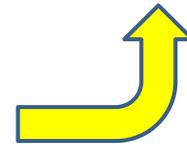
(1) $(2x + 7y) - 2(x - 3y)$ を計算しなさい。

	正答率
守口市	68.8%
全国 (公立)	73.5%

H29 A問題 2 (3)

(3) $(2x + 5y) - (6x - 3y)$ を計算しなさい。

	正答率
守口市	73.2%
全国 (公立)	78.8%



過去類似問題比較から、向上傾向がみえ、定着が図られている問題といえる。

7 学級委員の健斗さんは、2分間スピーチの時間をはかるための砂時計をペットボトルで作りました。その砂時計は、ペットボトルに砂を入れ、砂を通すための穴をあけた厚紙をペットボトルの間にはさんで作ります。

健斗さんは、ペットボトルに入れる砂の重さを決めると、砂が落ちきるまでの時間が決まると考えました。そこで、砂の重さが x g のときに、砂が落ち始めてから落ちきるまでの時間を y 秒として調べ、その結果を、次のように表にまとめ、下のグラフに表しました。



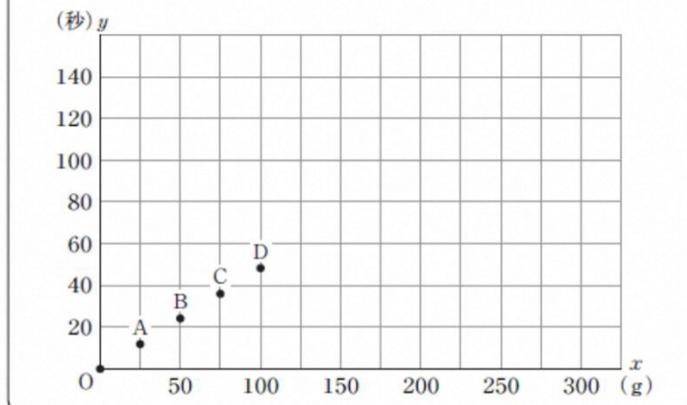
次の(1)、(2)の各問いに答えなさい。

(1) 調べた結果のグラフにおいて、砂の重さが75gのときに、砂が落ちきるまでの時間が36.0秒であったことを表す点はどれですか。点Aから点Dまでの中から記号を1つ書きなさい。

【趣旨】与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができるかどうかをみる。

調べた結果

砂の重さと砂が落ちきるまでの時間					
砂の重さ x (g)	0	25	50	75	100
砂が落ちきるまでの時間 y (秒)	0	11.9	24.2	36.0	48.3



■ 学習指導要領における領域・内容
〔第1学年〕C 関数

(1) 具体的な事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、比例、反比例の関係についての理解を深めるとともに、関数関係を見だし表現し考察する能力を培う。

ウ 座標の意味を理解すること。

正答 C

	正答率
守口市	91.7%
全国 (公立)	93.5%

児童生徒質問紙調査 結果概要

【学力向上に係る目標値の設定について】

児童生徒質問紙の授業改善及び自学自習力の育成にかかる項目の結果が全国水準を上回る状況を達成することで、学力全般において大阪府水準ひいては全国水準の学力を定着させることを目指し、下記の6項目に目標を設定しました。

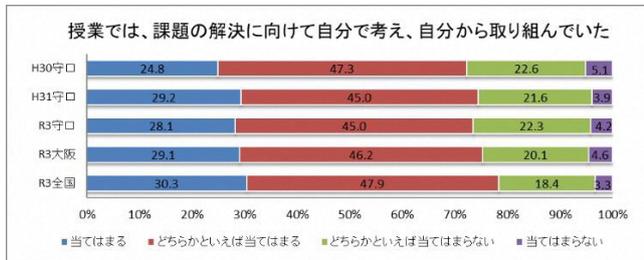
なお、この目標の達成時期は令和6年2月としております。

(※ 本年度は6項目中で調査がなかった1項目については、参考として類似の調査項目を示しています。)

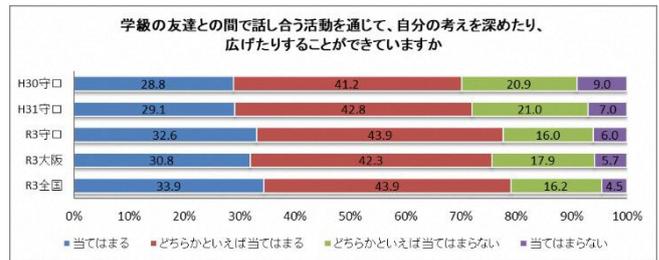
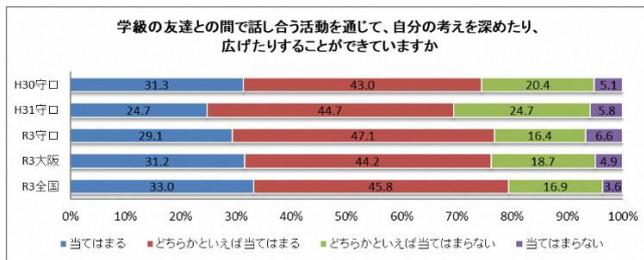
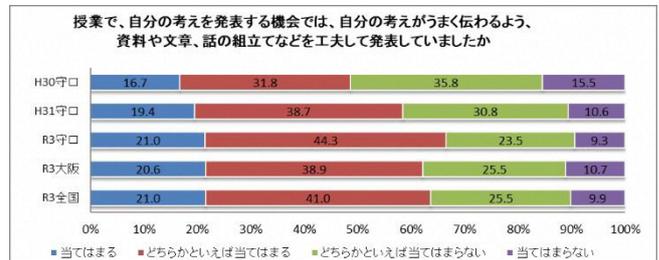
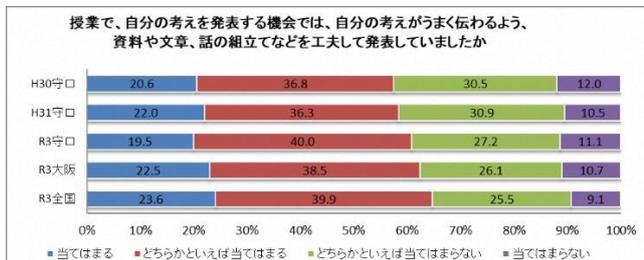
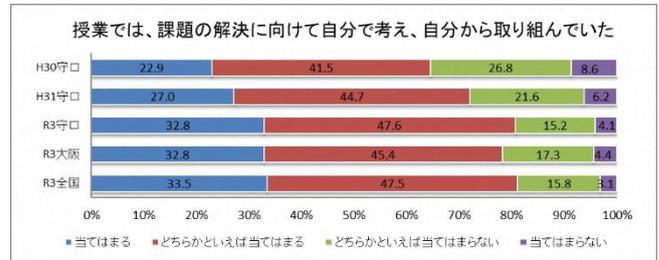
- ①授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる【肯定的回答の割合】
- ②自分の考えがうまく伝わるよう、話の組立てなどを工夫して発表している【肯定的回答の割合】
- ③話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている【肯定的回答の割合】
- ④家で、授業の予習・復習をしている【肯定的回答の割合】(今年度調査なしのため、「家で自分で計画を立てて勉強していますか」の項目を参考に掲載)
- ⑤学校の授業以外での平日における1日当たりの勉強時間【小：「30分以上」中：「1時間以上」の割合】
- ⑥学校の授業以外での平日における1日当たりの読書時間【小・中学校等ともに「10分以上」の割合】

授業改善にかかる調査（目標値を設定した項目）

【小学校等】



【中学校等】

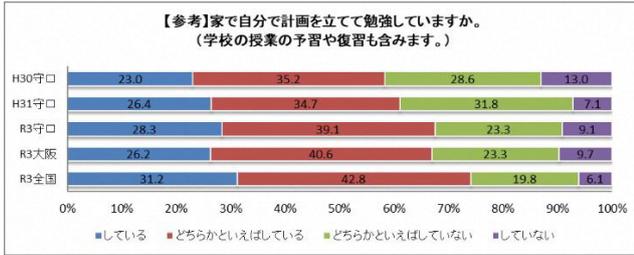


授業改善にかかる3項目の肯定的回答の割合は、小学校等の「課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいる」はほぼ横ばいであったが、それ以外の項目は小・中学校等ともに向上傾向で、特に中学校等においては全国を上回っているもしくは全国並みで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が推進されていると考えられる。

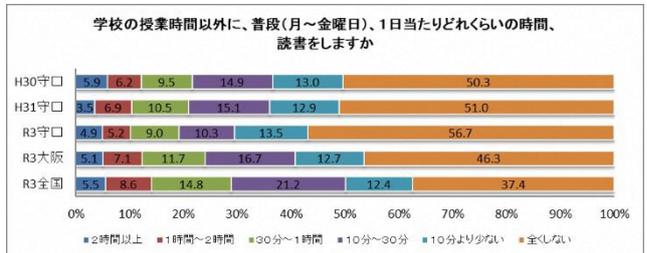
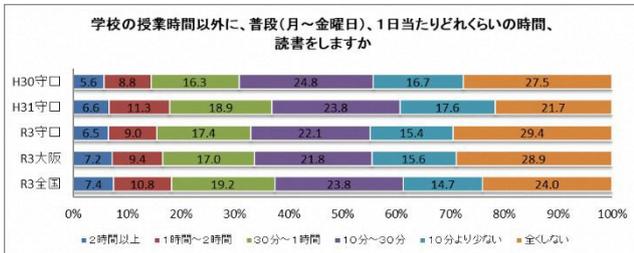
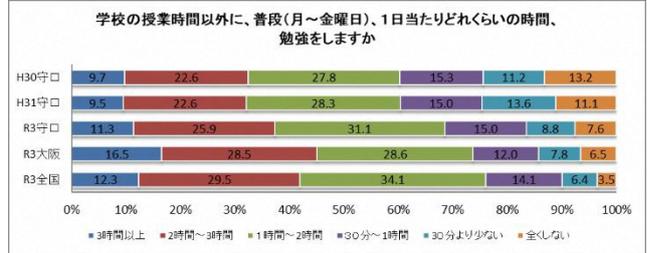
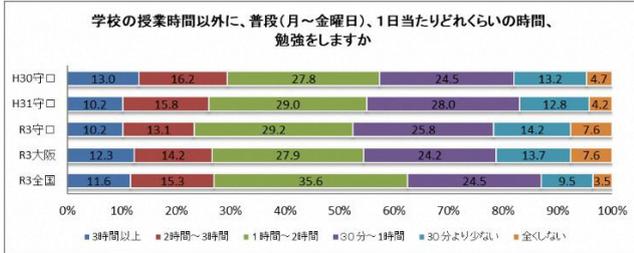
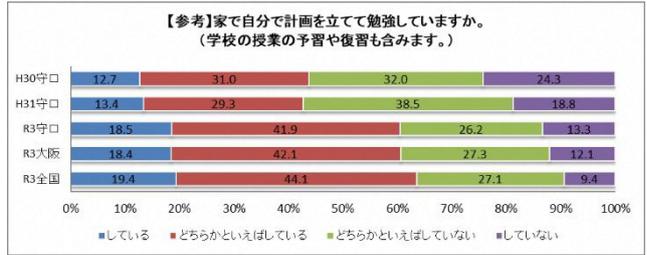
子どもたちが主体的・意欲的に授業に臨めるよう、引き続き授業のユニバーサルデザインの3つの視点(「焦点化」「視覚化」「共有化」)を取り入れた授業づくり等の授業改善を図っていくことが大切である。

自学自習力の育成にかかる調査（目標値を設定した項目）

【小学校等】



【中学校等】



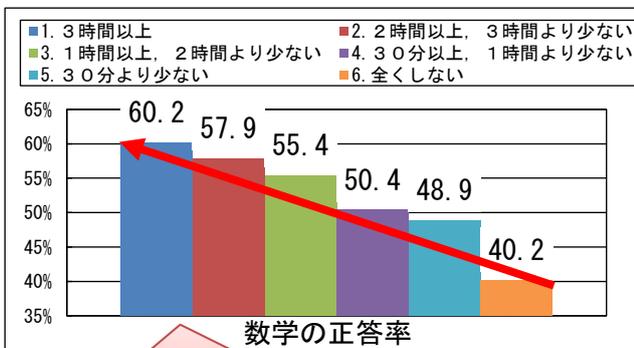
「自分で計画を立てて勉強している」の肯定的回答は小・中学校等ともに増加傾向で、家での勉強時間は、小学校等では 30 分以上の割合が若干減少しているものの、中学校等では1時間以上の割合は増加傾向で、全く勉強しない割合も減少しており、家庭学習習慣については改善傾向が見られる。

一方、読書時間が 10 分以上の割合は小・中学校等ともに減少し、全国を下回っており、読書を全くしない割合も特に中学校等で 56.7%と高い状況で、読書習慣の定着には課題が見られる。

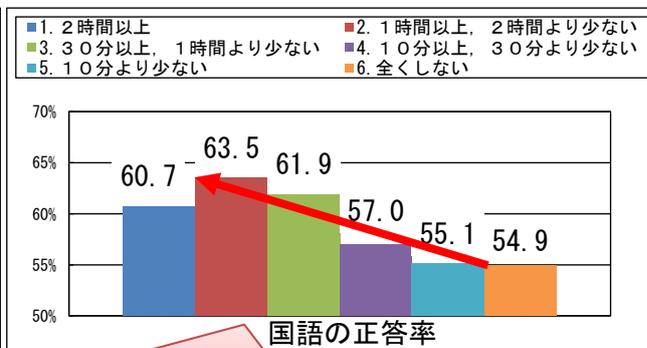
調査結果では、家での勉強時間が長い子どもたちは学力が高い傾向にあった。また、家での読書を全くしない子どもたちに比べ、小学校等では 10 分以上、中学校等では 10 分から1時間程度読書をする子どもたちの方が学力が高い傾向にあった(以下参考)。学校図書館全体計画等に基づき、日々の教育活動では引き続き児童生徒の読書習慣の形成、読書機会の確保に向けた取組みを推進していくことが重要である。

【参考】クロス集計（質問紙 - 教科）

(例) 家での勉強時間 - 数学 (中学校)



家での読書時間 - 国語 (小学校)



勉強時間が長い子どもたちは学力が高い傾向

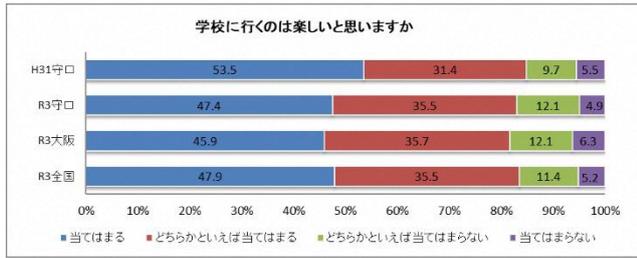
家で読書をまったくしない子どもたちに比べ、10分以上読書をする子どもたち(小学校)の方が学力が高い傾向



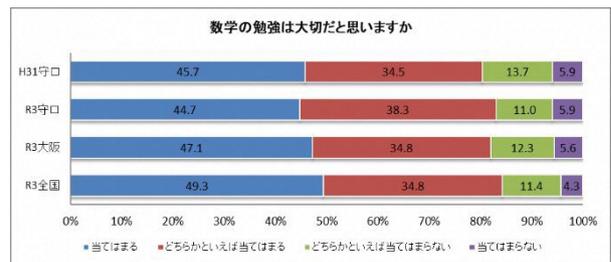
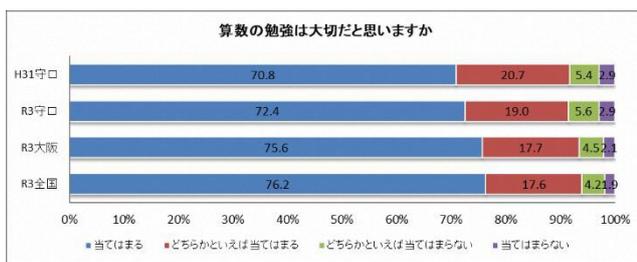
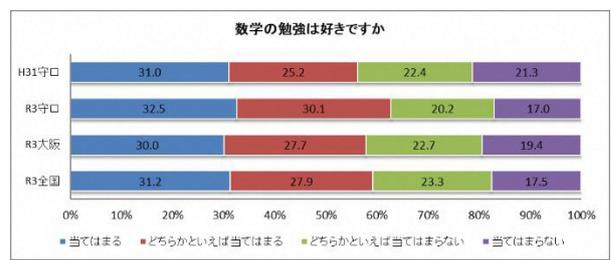
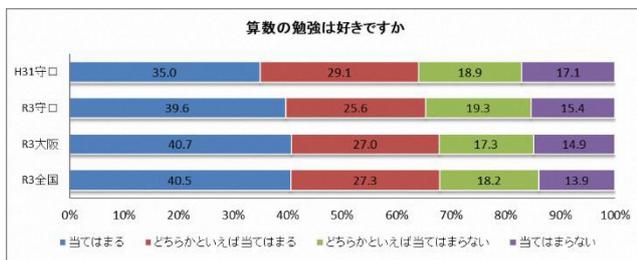
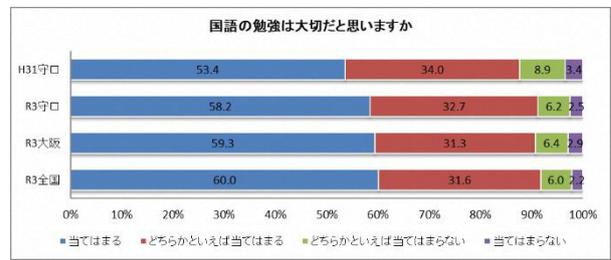
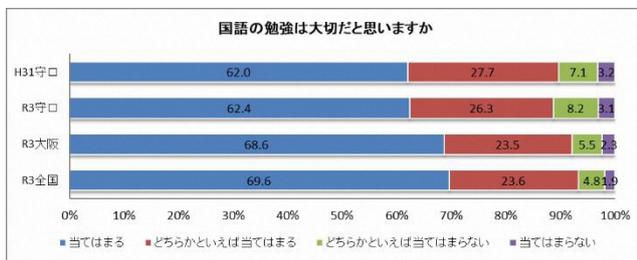
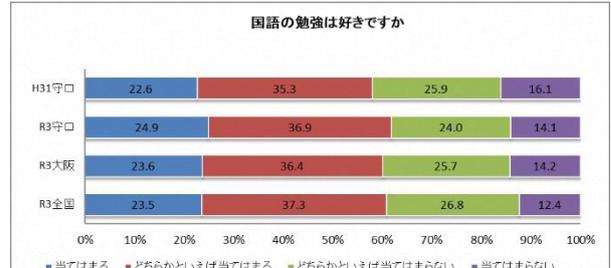
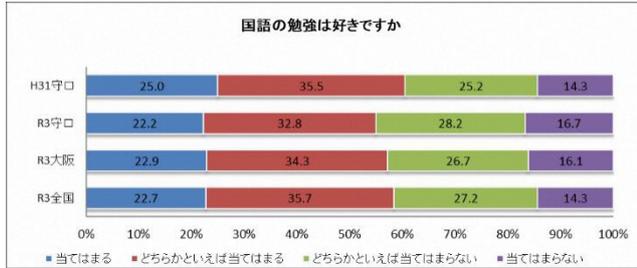
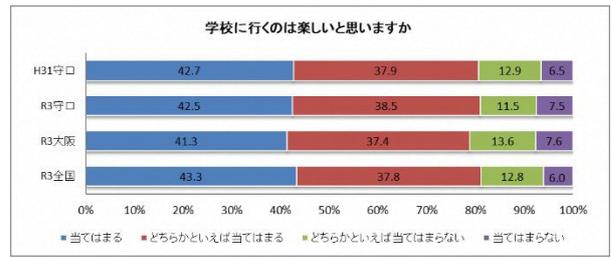
ご家庭では、テレビを消す、気が散るものを近くに置かないなどの学習環境づくりや、学習したことにできるだけ目を通して励ましたりするなどの言葉かけ、本の読み聞かせや家族と一緒に読書をする時間をつくるなど、引き続き学習習慣・読書習慣の定着に向けたご支援、ご協力をお願いします。

学校・勉強について

【小学校等】



【中学校等】



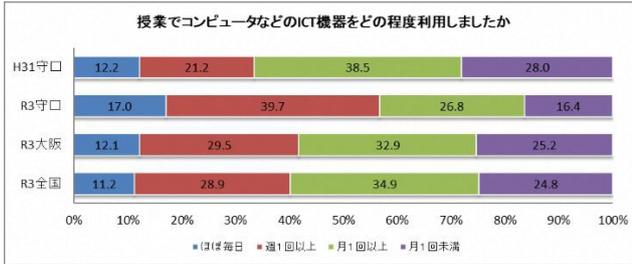
「学校に行くのが楽しい」に肯定的な回答をした割合は、小学校 82.9%(全国平均 83.4%)、中学校 81.0% (同 81.1%)と高い傾向であった。

また、「国語の勉強が好きだ」に肯定的な回答をした割合は、小学校 55.0%(全国平均 58.4%)、中学校 61.8%(同 60.8%)、「国語の勉強が大切だ」の割合は、小学校 88.7%(全国平均 93.2%)、中学校 90.9%(同 91.6%)、「算数(数学)の勉強が好きだ」に肯定的な回答をした割合は、小学校 65.2%(全国平均 67.8%)、中学校 62.6%(同 59.1%)「算数(数学)の勉強が大切だ」の割合は、小学校 91.4%(全国平均 93.8%)、中学校 83.0%(同 84.1%)と全国平均を上回っている項目もあり、高い傾向であった。

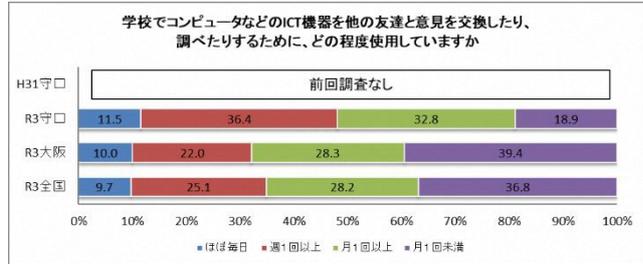
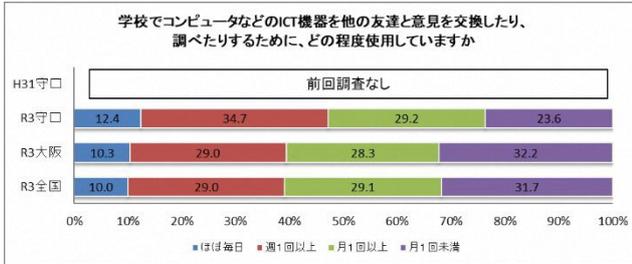
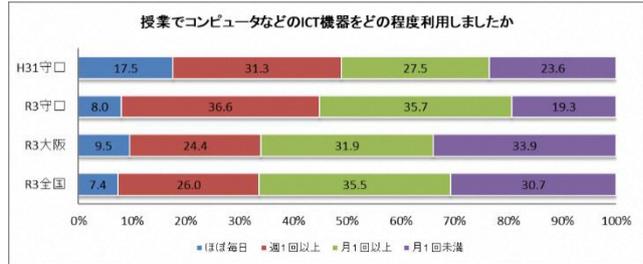
このように学習に対する興味・関心等が高い結果であったことは、主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を推進してきたことの成果の現れと考えられるので、今後も引き続き子どもたちが主体的・意欲的に授業に臨めるよう、授業改善を推進していくこととともに自学自習力の育成への取組みにも繋げていくことが大切である。

ICT の活用について

【小学校等】



【中学校等】

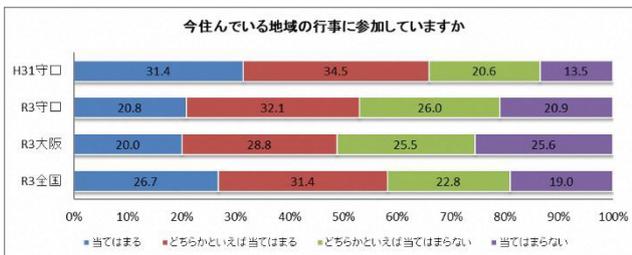


「授業でのコンピュータなど ICT 機器の使用頻度」や「コンピュータなどの ICT 機器を他の友達と意見を交換したり、調べたりするための使用頻度」で肯定的な回答(週1回以上)をした割合は、小・中学校ともに全国平均を大きく上回っており、使用頻度が月1回未満の割合も減少傾向であり、ICT 機器の整備やその活用が進んでいるといえる。

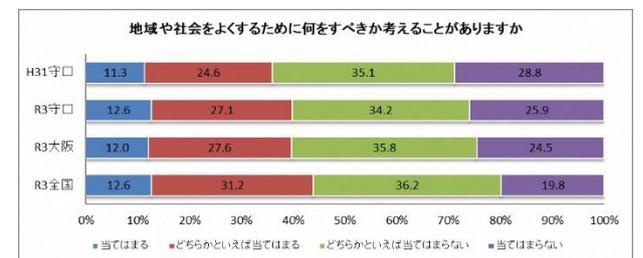
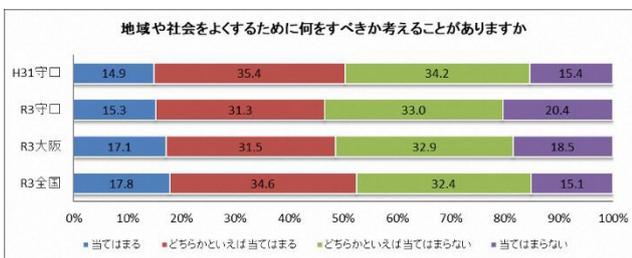
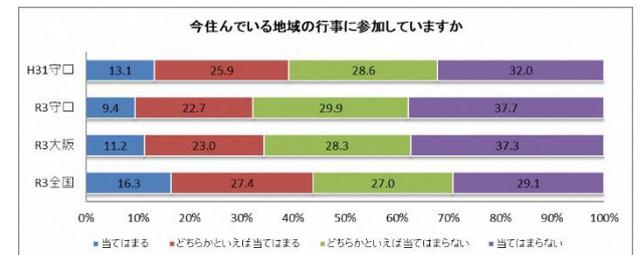
今後も、環境整備の充実とともに、日々の協働的な学びにおいて ICT 機器を効果的に活用している取組みを共有していくことが大切である。

地域との関わり

【小学校等】



【中学校等】



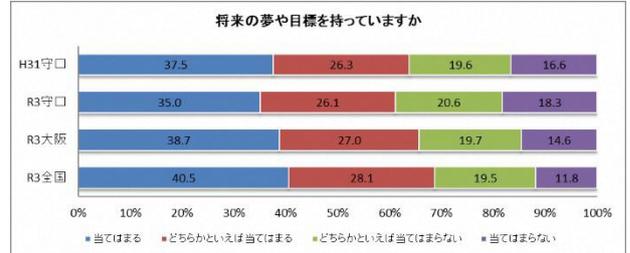
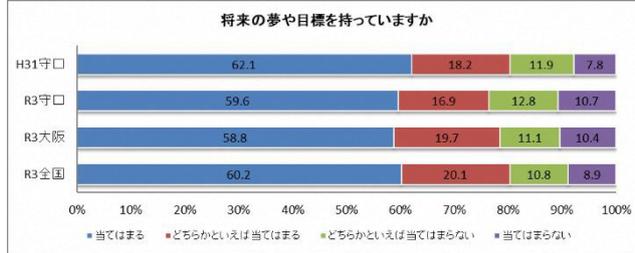
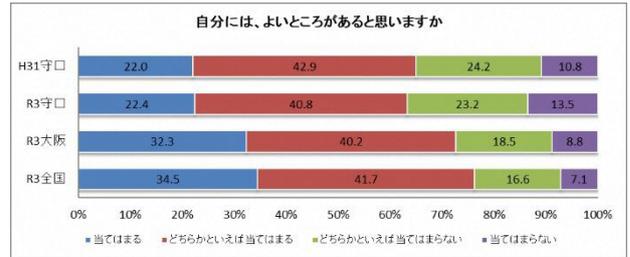
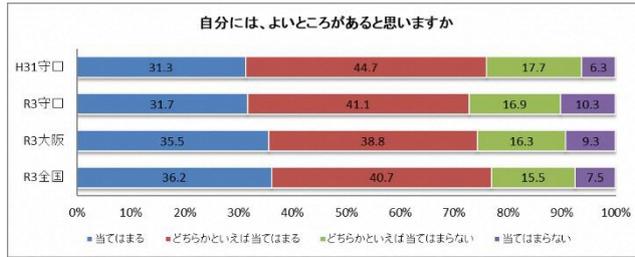
「今住んでいる地域の行事に参加している」に肯定的な回答をした割合は、小学校 52.9%(全国平均 58.1%)、中学校 32.1%(同 43.7%)、また「地域や社会をよくするために何をすべきか考える」に肯定的な回答をした割合は、小学校 46.6%(全国平均 52.4%)、中学校 39.7%(同 43.8%)と全国平均と比べて低く、地域課題解決の育成が課題である。

コロナ禍により教育活動に加え、地域行事も中止や開催方法の変更があることから、肯定割合が減少したと考えられる。子どもたちと地域や社会の課題について共有し、共に考える機会が設定できるよう、各中学校区等に設置した学校運営協議会にて取組みを進めていく必要がある。

自己有用感

【小学校等】

【中学校等】

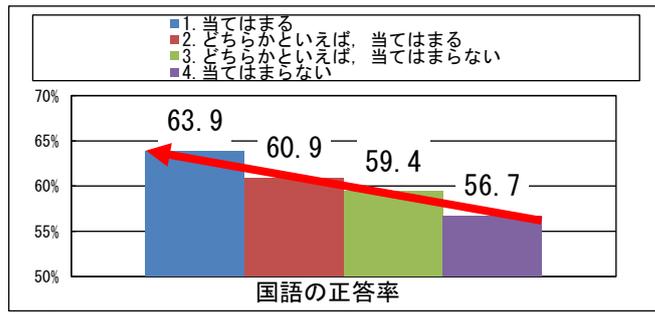
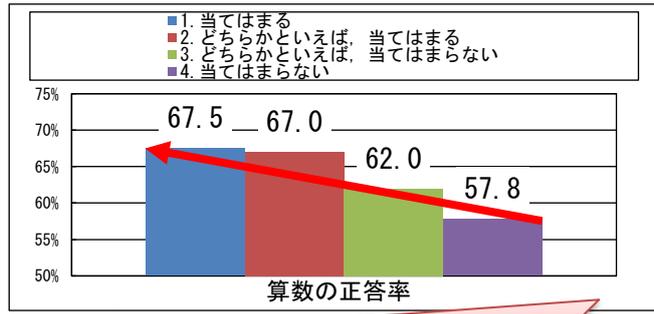


「自分にはよいところがある」に肯定的な回答をした割合は、小学校 72.8%(全国平均 76.9%)、中学校 63.2%(同 76.2%)、また「将来の夢や目標を持っている」に肯定的な回答をした割合は、小学校 76.5%(全国平均 80.3%)、中学校 61.1%(同 68.6%)と全国平均と比べて低く、自己有用感の育成が課題である。

調査結果では、「自分によいところがある」に肯定的回答をした子どもたちの方が学力が高い傾向にあった(以下参考)。日々の教育活動では、自分のよいところを発見できるような活動を充実させていくことが大切である。

【参考】クロス集計 (質問紙 - 教科)
(例) 自分によいところがある - 算数 (小学校)

自分によいところがある - 国語 (中学校)

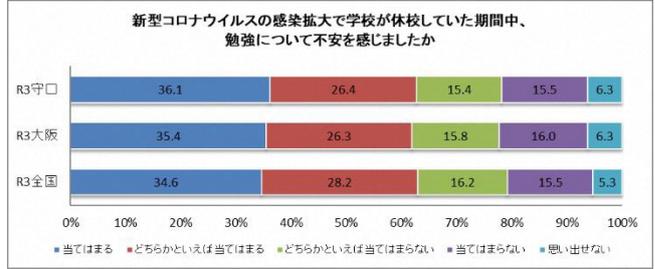
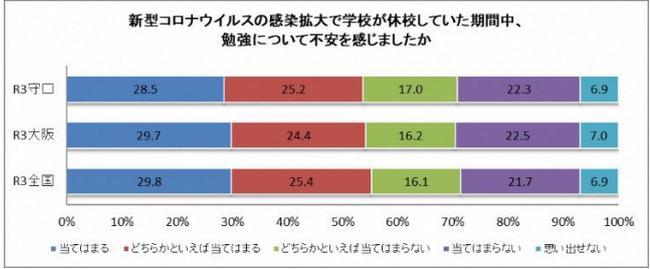


自分によいところがあると肯定的に捉えている子どもたちは、国語や算数(数学)の学力が高い傾向

ご家庭でも、お子様のがんばったところをほめたり、成長を認める言葉かけをしたいするなど、引き続き自己有用感の育成に向けたご支援、ご協力をお願いします。

コロナ禍の影響について【小学校等】

【中学校等】

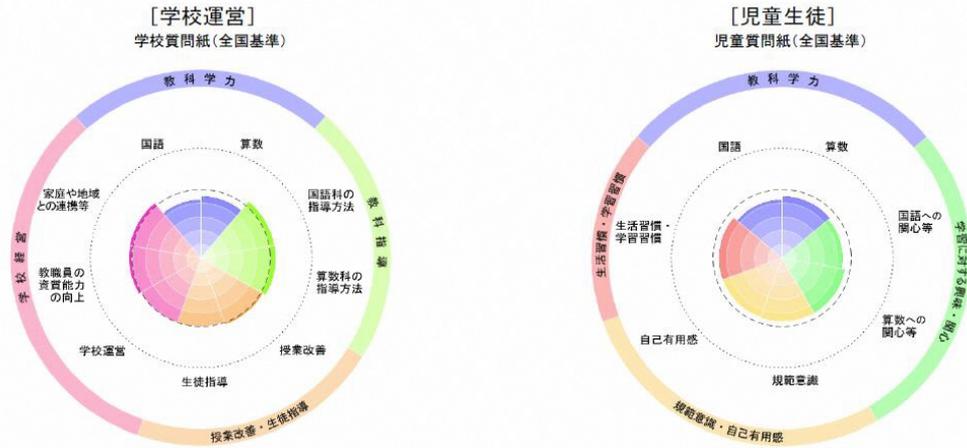


「コロナ禍での休校期間中、勉強について不安を感じた」と回答をした割合は、小・中学校ともに半数を越えており、全国と同様の傾向であった。

引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を徹底していくことが大切である。また、やむを得ず学校に登校できない子どもたちに対しては、オンライン学習等により学習に著しい遅れが生じることのないようにするとともに、ICT 機器等も活用しながら規則正しい生活習慣を維持し、学校と子どもたちとの関係を継続することが重要である。

結果レーダーチャート

【小学校等】



<令和3年度調査の領域名と学校質問紙の質問番号の対応一覧表>

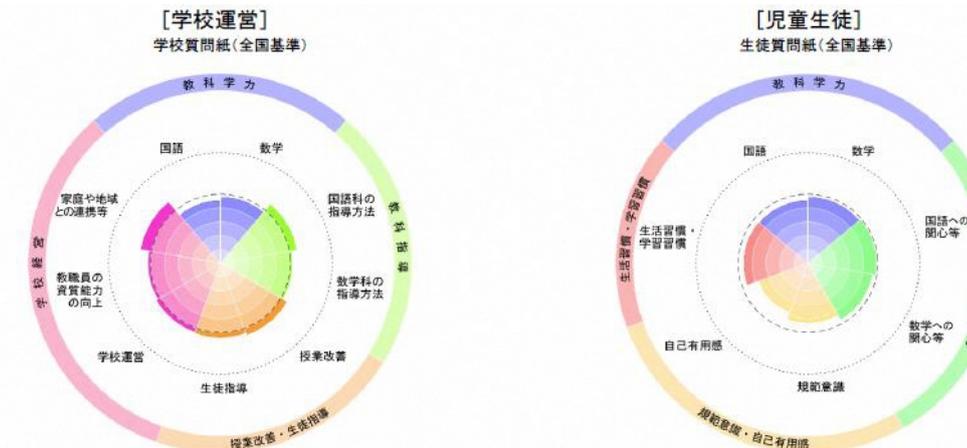
領域番号	領域名	小学校学校質問紙 対応領域・項目番号
I	1 教科学力	国語
		算数
II	3 教科指導(※)	国語科の指導方法 (49)~(54)
		算数科の指導方法 (55)~(60)
III	5 授業改善・ 生徒指導	授業改善 (29)(36)(37)
		生徒指導 (7)~(11)
IV	7 学校経営	学校運営 (16)(18)~(21)(91)
		教職員の資質能力の向上 (17)(22)~(28)
		家庭や地域との連携等 (80)~(84)

※国語科の指導方法として(49)~(54)、算数科の指導方法として(55)~(60)の項目について、全国を比較基準とした平均値を基にした各領域の値である。

<令和3年度調査の領域名と児童質問紙の質問番号の対応一覧表>

領域番号	領域名	小学校児童質問紙 対応領域・項目番号
I	1 教科学力	国語
		算数
II	3 学習に対する 興味・関心	国語への関心等 (43)~(46)
		算数への関心等 (52)~(55)
III	5 規範意識・ 自己有用感	規範意識 (10)~(12)
		自己有用感 (6)(7)
IV	7 生活習慣・ 学習習慣	生活習慣・学習習慣 (1)~(3)(17)

【中学校等】



<令和3年度調査の領域名と学校質問紙の質問番号の対応一覧表>

領域番号	領域名	中学校学校質問紙 対応領域・項目番号
I	1 教科学力	国語
		数学
II	3 教科指導(※)	国語科の指導方法 (49)~(54)
		数学科の指導方法 (55)~(60)
III	5 授業改善・ 生徒指導	授業改善 (29)(36)(37)
		生徒指導 (7)~(11)
IV	7 学校経営	学校運営 (16)(18)~(21)(91)
		教職員の資質能力の向上 (17)(22)~(28)
		家庭や地域との連携等 (80)~(84)

※国語科の指導方法として(49)~(54)、数学科の指導方法として(55)~(60)の項目について、全国を比較基準とした平均値を基にした各領域の値である。

<令和3年度調査の領域名と生徒質問紙の質問番号の対応一覧表>

領域番号	領域名	中学校生徒質問紙 対応領域・項目番号
I	1 教科学力	国語
		数学
II	3 学習に対する 興味・関心	国語への関心等 (43)~(46)
		数学への関心等 (52)~(55)
III	5 規範意識・ 自己有用感	規範意識 (10)~(12)
		自己有用感 (6)(7)
IV	7 生活習慣・ 学習習慣	生活習慣・学習習慣 (1)~(3)(17)

学校質問紙では小・中学校ともにバランスがよく、全国並みもしくは全国以上の結果であった。特に、教科の指導方法や授業改善、家庭や地域との連携等の項目は全国よりも高い結果で、特に中学校では高い傾向であった。

児童質問紙では全体的にバランスがよいが、全国よりも低い状況であった。質問紙の詳細は先述して内容のとおりであるが、中学校等の自己有用感の項目が他に比べて低い状況であるのは大きな課題である。

他の項目に比べて低いスコアとなっている国語への関心を高める授業改善(小学校等)、自己有用感や規範意識を高める教育活動(中学校等)にしっかりと取り組むことによって、学力の向上につながる可能性があると考えられる。また、地域や家庭との連携等も高い状況にあることから、その強みを生かし、地域や家庭と協力した生活・学習習慣の見直しなどに取り組むことも重要と考えられる。

教育委員会の今後の取組み

「守口市学力向上プラン」(令和3～5年度)を着実に推進

■ 授業改善の推進

「主体的・対話的で深い学び」の実現。

すべての児童生徒にとって「わかる」「できる」授業づくりに向けた学力向上推進教員会議や教職員研修会の開催、校内研究支援、好事例の発信等。

国語: 言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質能力の育成。

算数・数学: 数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質能力の育成。

⇒資質能力の育成を見取り、今後の授業改善につなげるための問題(「力だめしプリント」や「ことばのちから」等の問題や定期テストでの記述式問題)の定期的な活用

■ 自学自習力の育成

学びに向かう力の育成に向けた家庭学習の充実。

知識・技能の定着、応用力・活用力の育成に向けた指導、民間活力を活用した放課後学習等の学習支援事業の推進、学校図書館の計画的な利活用の促進

■ ICT 機器の活用

1人1台タブレット端末の効果的な活用の促進。

協働学習支援アプリ、AIドリル、学習者用デジタル教科書等の活用、定期的なアンケート調査や学習履歴の分析等によるきめ細やかな個別の状況把握、好事例の発信。

■ 家庭、地域との連携

学習習慣、生活習慣の改善に向けた啓発や「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校運営協議会との連携した取組みの推進。

■ 新型コロナウイルス感染症の拡大に備えた学習保障・オンライン授業の実施

■ 調査結果の詳細な分析